

# 甘え

三地域エントリー

地域間コンサルタント：衣笠隆幸（日本、北米）、Elias M. da Rocha Barros（中南米）、  
Arne Jemstedt（ヨーロッパ）

地域間連携共同議長：Eva D. Papiasvili（北米）

## I. 導入的定義

甘えは、一般的に日常的に使用される日本語の言葉である。それは、甘えるという動詞の名詞形である。どちらも「甘い味」を意味する形容詞、甘いから派生している。甘えるは、「得る」や「獲得する」を意味する動詞「える」と甘いの結合である。それゆえ、甘えるの元々の意味は、文字通り、甘いものを得るということである。一般的には、甘えるは、寛大さを引き出し、望んだものを手に入れるために、子どものような、依存的なやり方で振る舞うことを言う。望んだものとは、愛情、身体的親密さ、情緒的あるいは実際の援助、要求への同意といったものである。それは、わがままであることをアピールする行動であり、ある程度のなじみ深い親密な近接を想定している。典型的には、乳児や子どもが、自分の願望を認めてもらうために、母性的な人物や世話をする人に愛らしく依存する方法で関わるのであろう。

甘えと甘える行動は、なじみのある環境や子ども時代に限らず、日本人の対人間の交流において見受けられる。これは、親密な個人的友情、カップル関係の親密さ、拡大家族、同級生やチームメイトのような密着した小グループの中で生じるかもしれない。また、教師/生徒、上司/部下、先輩/後輩といった仲間のような権力や地位の差のある関係においても認められる。対人関係の状況により、甘えという現象は、関係性の強さや健全さの意味を表わすものとして広く受け入れられている一方で、人の未熟さや自分勝手さ、権利の感覚、社会に対する認識や常識の欠如としてネガティブにも理解されている。

The North American Comprehensive Dictionary of Psychoanalysis において、Salman Akhtar(2009)は、甘えを「断続的に繰り返される、文化的に形作られた交流を意味する日本の言葉であり、そこでは礼儀や形式といった通常の規則が猶予され、人々が互いのために愛情深い自我の支援を受け取ったり与えたりする」と定義している (p.12)。この定義は、土居健郎の(1971/73)言葉の定義を元にしており、Daniel Freeman(1988)によって、自我心理学用語を用いて「相互交流における自我のための相互退行であり、両方の参加者の漸進的

な精神内界的成長と発達に資することでそれらを満たすものである」と更に拡張されている (Freeman, 1988, p.47)。日本の精神分析事典の編集者 (小此木啓吾、北山修、牛島定信、狩野力八郎、衣笠隆幸ら 2002) もまた、土居の定義に基づいており、甘えの力動的基礎に含まれる前言語的に根ざした情緒的依存の複雑さを指摘している。

ヨーロッパおよび中南米におけるどの IPA 言語による辞書や用語辞典にも甘えは掲載されておらず、この用語は、今に至るまで、広く精神分析的な関係者にほぼ知られることはなかった。この項目は、上記のすべての出典を元にし、拡張するものである。

## II. 概念の発展

心理的現象として、甘えの概念は土居健郎の 1971 年の『甘えの構造』の出版によって紹介され、強調された。この本は、1973 年に西洋の読者のために翻訳された。彼は、日本社会と臨床場面における様々な甘えの行動を描写した。そして、日本人の心理を理解する中で、甘えという概念の基本的な重要性についての考えを発展させた。彼は、甘えを「依存あるいは情緒的依存」と訳した。そして、甘えるを「人の善意に依存し前提とすること」(1973)を意味すると定義した。彼はそれを「無力さと愛されたいという願望」そして「愛されたいという欲求」の表現を示していると考え、それを依存欲求に同等であるとみなした。彼は、母親に対しての関係における乳児の心理の中にその原型を見る。乳児と言っても新生児ではなく、母親が独立した存在であると既に認識した乳児である (土居 1973)。後の著作で、土居 (1989) は甘えの力動的定式を拡張している。

「甘え」概念についていま一つ重要な点は、「甘え」は愛されたい欲求が満たされて満足する状態を意味するとともに、そのような欲求自体を意味することができることである。というのは甘えの満足に必要な相手の協力はいつも期待できるとは限らない。したがって甘えが満たされていない状態を表現するいくつもの日本語が存在するが、そのような状態をも端的に甘えと称することがある。というのは甘えが満たされている際よりも満たされていない場合の方がはっきり欲求として認識されるからである。このような「甘え」の語の用法に関連するが、甘えにはたしか受け手がある素直な甘えと、そうではない屈折した甘えの二種類が存在することになる。前者は幼い子供にふさわしく、無邪気で、落ち着いているが、後者は子供っぽく、わがままで、要求がましい。簡単に言えば、いい甘えとわるい甘えである。・・・(土居 1989 p.349) (「甘え」概念とその精神分析的意義)

甘え、すなわち情緒的依存が、日本人の心理を根本的で独特な方法で区別するという土居の主張は、熱狂的に受け入れられたが、懐疑的な批判にもあった。次のような議論を引き起こした。どのような特定の方法で日本人の心理を考えるべきなのか？土居は、日本人の性格は基本的に依存的だということを提唱しているのか？甘えという概念は、現行の心理学的、精神分析的理論や臨床にどのように関係しているのか？甘えは、普遍的な人の発達の理解にどのように関係しているのか？甘えという概念は、精神分析的理論や臨床において、具体的にどのような新しい発展に寄与するのか？

### Ⅲ. 社会—文化的視点

Erik Erikson (1950)は、人の心理的成長と発達が進行する間、多様で特有な文化社会的影響が如何に適応状況に異なる結果をもたらすのかを記述した。彼は、フロイトの生物学的な基礎をもった心理学的発達の段階をエディプス葛藤の解決を超えた、人の発達の心理社会的段階を含める方へと拡大し、ライフサイクルへと展開した。土居の甘えの概念と日本人の心理の特異的な性質を理解するうえでの重要性は、この文脈でも評価される。

多くの社会学者や比較文化的観察者は、日本の社会と日本人の心理的適応の特異性について述べている。土居の甘えの概念は、この議論に別の観点を加えた。日本の社会と文化に特異的なものとして記述されたいくつかの重要な特徴は、以下のものを含んでいる。

1. 階層構造的に組織化された社会的関係
2. 個人の区別以上のグループ志向
3. 公私の分離、思考、感情、行為における内と外の関係
4. 恥（外の判断によって生じる）と罪（内的な判断の表出）の強調
5. 葛藤の回避と調和の重要性
6. 乳児期や早期幼児期の寛大で反応の良い、寛容な親の態度の後、後年には、次第に厳格な社会的役割の割り当てと行動のへ支配が続くこと

Ruth Benedict (1946)や歴史家の Edwin O. Reischauer (1977)のような文化人類学者によって広く認知され、注意深く観察され、海外でもっとも有名な日本の文化人類学者である中根千枝によって明確に述べられているように (1970)、ほとんどの日本人の関係の縦構造の性質は、偏在している。それに関連し、かつ絡み合って、上記に引用した特徴は、堅固な

政治と社会経済階級の階層化のあった 4 世紀にわたる封建制度の文化的および心理的影響である。西洋の影響を受けた近代化は 19 世紀後期に始まり、第二次世界大戦後の新しい民主的な統治の諸制度の確立と政治、経済、科学技術の進歩による大衆生活における多くの社会の変化によって加速した。しかしながら、精神的底流として、現代日本人の生活における伝統的文化の価値や特徴は、持続している。Reischauer(1977)は、日本人の変化への適応能力について書き記し、東洋と西洋の間の多くの人間的共通性を認めている。Dean C. Barnlund (1975)は、社会において標準的であると言われている文化的価値の核の持つ凝集性についてアメリカと日本を比較文化的に分析し、甘えを「文化的無意識」の代表として述べている。

この観点から甘えの理解において重要なことは、継続的な身体的親密さ、寛容さ、応答性、非常に没頭的な母親の世話、子供の周囲に他の世話する人がいるような状況における子育ての実践である。島国の生活は空間が限られているため、他人と近接していることや、並んで生きる必要があることが、日本の生活状況である。拡大家族だけでなく、隣人や住んでいるコミュニティに、非常に早期から子供は触れることになる。近所の大人は、おじさん、おばさん、年長の子どもたちは、お姉さん、お兄さんと呼ばれる。彼らは、子どもの生活における潜在的な世話人であり、グループに所属するうえでの安全感を促進する。Alan Roland (1991)は、日本人の精神に顕著な「家族の自己」という概念と西洋人の「個々の自己」とを強く対比している。「家族の自己」とは、家族やグループの微妙な情緒的階層関係に根差している。Reischauer (1977)は、日本人は、家族というよりもむしろ、周囲のグループに結び付いていると述べている。このことは、早期からグループの中に自分の場所を見つけ、それを内在化するという意味での「グループの自己」というものを示唆しているのかもしれない。

この力動の説明の実例として、七五三という日本の伝統的なしきたりによる祝いが挙げられる。2 歳から 3 歳、4 歳から 5 歳、6 歳から 7 歳の子供たちは、伝統的な衣装を着て、地域にある地元神社に連れていかれる。彼らは、子ども時代を通過する集団の祝典で、プレゼントとしてお菓子やおもちゃをもらう。

#### IV. 甘え概念の精神分析的含意

先に記したように、日本人や臨床的交流における甘えという特異な現象を表すに当たって多くの意味で正確で洞察力のあるものである一方、「無力さにある依存欲求」と「愛されたい願望」という土居の最初の甘えの概念の定義 (1973) は、多くの理論的および臨床

的議論を引き起こした。発達的には、*甘え*は、子どもが言葉を獲得するよりも先に起こる。例えば、母親に積極的に願望を表現する子どものことを、日本人は「この子は、既に非常に情緒的に依存している（*甘える*）」と言ったりする。乳児が母親の存在を求める欲望を経験し続けると、この情緒の布置が意識的にも無意識的にも彼/彼女の情緒生活の核に位置するようになる。このことは、Freud が精神分析に独特の「性愛」の概念について述べたことと比較することができる。「われわれは、Sexualität『性愛』という言葉を用いるのと同じように包括的な意味で用いる」(Freud, 1910)。この意味で、日本語には、lieben や love に相応しい言葉は、存在しないにも関わらず、愛と性が絡み合うエディプス・コンプレックスについて考えるのである。類推であるが、「*甘え*」は、エディプス・コンプレックス以前に、われわれの一生を通じて情緒的生活の主流を形成するし、「*甘え*」という言葉が存在しない日本の外においてできえそうであると理解しうるかもしれない。*甘え*は、愛のように動詞的概念であるが、愛と異なり、それ自身だけでは「性愛」を含まないという事実によって特徴付けられる。加えて、*甘え*の要素は、アンビバレンスによって強調されるような様々な心理的状态に含まれていると言える。もしそうであれば、*甘え*を様々な既知の精神分析的概念と比較することは、有用かもしれない。

Freud は愛には二つの流れがあると述べている。すなわち、情愛的潮流と官能的潮流である。「これらの潮流のうち情愛の潮流の方がより古い。これは幼児期のもっとも早い時期に由来し、自己保存欲動の利にもとづいて形成され、家族や世話を務めてくれる人物に向けられる・・・」(Freud, 1912, p.180) これは甘えの自己保存的、本能的土台に対応する。そこから生じる情愛的潮流は後にナルシズムの概念に吸収された(Freud, 1914)。ここで Freud は、一次的ナルシズムは直接の観察によっては確かめられないけれども「それが実はどうの昔に手放された親たち自身のナルシズムの再活性化であり再現であることは・・・自分の子供に情愛をもって接する親たちの態度」から知ることができると書いている(Freud, 1914, pp.90,91)。Freud(1930)は後に自己保存本能という概念を廃止し、情愛をエロス(生の欲動)の現れとし、その元の目的は抑圧されるという結論に至ったのであるが、土居は*甘え*を Freud の初期の本能論に従って自己保存本能に対応すると提案し、*甘え*を本能由来の依存欲求と定義した。

付け加えるならば、Freud(1921)は同一化を他者との情緒的繋がりのもっとも早期の表現であり、最初からアンビバレントであると見ている。そう定義するならば、Freud の同一化は*甘え*の根底にある一体性とアンビバレントな特性に一致するであろう。

その概念をさらに対象関係の中で練り上げ、土居(1989,p.350)は*甘え*は初めから対象関係的であると何度も繰り返している。*甘え*は Freud の一次的ナルシズムという概念とはあまり一致するわけではないが、それは「ナルシスティックと言われる精神状態が何であれ、それに非常によく合致している」(同, p.350)。この意味で、*甘え*のナルシスティックな特性

は、子供っぽくて我儘で要求がましい「屈折した」*#え*の基礎をなしている。土居(1989)は次のように述べている(1989)。「同じような理由から、コフート Kohut,H.が『ナルシスティックなリビドーによって備給されている太古的対象』(1971,p.3)と定義した自己一対象という新しい概念は、*#え*の心理学に照らすと理解しやすくなるだろう。なぜなら、『ナルシスティックなリビドー』とは屈折した*#え*に他ならないからである」(土居,1989, p.351)。この意味で日本の分析家は Kohut の「自己一対象への欲求」という概念をほとんど*#え*に等しいものと捉える。また Balint が「治療の終結期には患者がこれまで忘れていた幼児的本能的欲求を表現するようになり、周囲によって満足させられることを求めるに至る」(Balint,1936/1965,p.181)と述べているのも、これに関連している。なぜなら、「素直な*#え*はナルシスティックな防衛が十分に解決されて初めて出現する」(土居,1989;p.350)からである。

Freud と Ferenczi の両者の上に築かれたために、「受身的対象愛」と一次愛についての Balint(1936/1965)の考えは概念的に*#え*にもっとも近いものである。Balint はインドヨーロッパ諸語は能動型と受動型という 2 種類の対象愛を明確に区別しないと考えた。その目的が最初は常に受け身(愛されること)であっても、もし欲求不満を鎮めるために環境が子供に与える愛と受容が充分であれば、その子供はそれを受け取るために能動的な「与える愛」に進むだろう(「能動的对象愛」の形)。臨床の言葉で言うならば、素直な*#え*と Balint の「良性の退行」の間、及び屈折した*#え*と彼の「悪性の退行」の間には、関連がある。

Fairbairn(1952)は概して早期の発達における依存の事実に着目しているが、彼は対象関係体系の中に依存欲求という考えを採用しなかった。Klein の羨望(ひがみ)や投影同一化(1957)の概念は、同じ対象を共有しつつも、ねじれた*#え*とみることができる。Bion(1961)が3つの基底的理想グループの幻想、すなわち依存、闘争-逃避、つがいに関連したそれぞれの情緒状態における安心感を集団力動の中で想定する時、多くの日本の分析家は Bion は土居の*#え*を「予言」していたと見る。同様に、Bion の「コンテナ container」と「コンテインド contained」の概念、Winnicott の「抱えること holding」、Hartmann の「適合 good fit」、Stern の「間-情動性 inter-affectivity」は、*#え*と基本的な概念上の類似を示している。それらは、親に対する乳児の生来備わった依存という異なった視点から考えられたものであるが、精神分析過程の中での転移-逆転移の間-主体的マトリックス inter-subjective matrix にとって臨床的な意義を持つものである。

## V. さらに発達論的精神分析的パースペクティヴ

発達論的力動的観点からは、次のことを強調することが重要である。すなわち、土居(1971)

は#えの起源は乳児の母親への関係性の中にあると見ているが、それは新生児の時にはなく、乳児が自分の独立した存在に気付き、母親を欠くことのできない満足の源としてみなすようになった時だと考えている、ということである。このことが示しているのは、認知・判断・同一化のような自我の分化がすでに起こり、対象恒常性が存在している発達段階において#えが生じるということである。それは、Mahler(1975)の分離-個体化期の真っ最中であり、共生期と練習期を無事に通り抜けたことを示している。母親は別の人として存在し、母親の子供に向ける優しく寛大な喜びが内在化されている。

もしこの通りであるならば、超自我という心的構造も現れつつある途上にあることになる。(日本で) 広く行われている日本人の子供のしつけ方は、この見方を支持しているように思われる。非言語的で共感的な応答性と情緒的のみならず身体的にも近い有り余るほどの母性的世話は、子供の発達における共生期及び分離-個体化期を満足のいくように通過することのために役立てられる。乳児研究 (Stern,1985) および自己心理学の進歩も、近年、成長を促してゆるぎない自己感をもたらすこの親の取り組みを支持している。

Gertrude と Rubin Blanck(1994)の発達の図式的概要では、#えは攻撃欲動の中和の過程において生じるように見える。そしてこの間に#えは分離個体化が活発に進行していくのに役立つ。トイレット・トレーニング、体の働きを制御する能力、男根的自己主張の表出が始まると、超自我の発達による攻撃欲動の緩和が起きる。この典型的な西洋の筋書きと比較して、Reischauer(1977)の観察によると、日本人の子供のトイレット・トレーニングや行動に対するしつけは、手本・励まし・注意により継続的で常に優しい配慮や世話を伴って行われる。これらの方法は、攻撃欲動を緩和し外界の期待に応えるために個人的欲求を断念する中で、世話をする人に子供が同一化することを促進し、このようにして違った道筋をたどって超自我形成に至る。それでもなお、どんどん複雑になりしばしば拘束的な世の中の規則・役割・調和への要求・服従などは、適応するには困難な文化的価値観となり、まだ脆弱な個人の精神にかなりの重圧を課する。外部の審判による恥や、愛情のこもったつながりが撤去されるという脅しが、子供の個人的欲求を放棄して超自我の要求への追従に駆り立てるように利用されるかもしれない。

超自我とイド要求の葛藤的交渉の中で、発達の最接近期への退行が起きるかもしれない。そこで子供は個人の独立した道に再び前進していく前に、共生的な母性的快適さというつかの間の安心感を探し求める。Akhtar(2009)も Freeman(1998)も共に#えの機能の情緒的燃料補給の側面を記述している。Freeman が一時的で断続的な思慕としての#えを観察したことと、#えの相互作用における相互の利益を彼が強調したことは、この仮説を支持している。#えの相互作用の相互性についての彼の観察を拡張すると、#えは「依存している」側によって、主としてもう一方の側の利益の為に始められることがあるということもまた理解されるべきである。たとえば、#えする人は不安そうな母親が子供によって安心させられる必要性を意識的にも無意識的にも感じているかもしれない。なぜなら、分離していきたくいと

いう子供の欲求は母親にとって拒絶と捉えられるかもしれないからである。甘えはまた、自信がない上司が迎合的な部下に対して力を感じようとするニードにも合致するかもしれない。あるいは、年取った親が成長した有能な子供に対して自分の価値を経験したい欲求の時にも当てはまるだろう。ついでに言えば、時には「友好的な」甘えの態度は、それらしく依存的な態度で表現された挑戦的で攻撃的な要求を偽装しているかもしれない。これは、土居(1989)の「陰性の屈折した甘え」で述べていることに一致しているだろう。

「愛されることへの無力な願望」という土居(1971,1973)の元々の甘えの定義は受け身性を強調しているが、この受け身的な面はそれ自体複雑である。土居(1971,1973,1989)と同じように Balint(1935/1965; 1968)は甘えを一次的な生物学的基本的欲求であり愛への渴望と見た。そして、Bethelard と Young-Bruehl(1998)は土居の甘えを欲しいままに愛されることへの期待と考え、彼らはそれを大事にされること *cherishment* と呼び、本能に根差し出生時から生じるとした。彼らは土居がしたように、甘えに関して自己保存自我本能仮説の再考を提案した。能動的関与に関する乳児のより大きな能力を示している最近の乳児研究に照らして、甘えに関しての「受動-能動」の範囲はさらなる研究を必要とするだろう。甘えという文脈では、行動として観察されるこの能動性は、たとえば Bowlby(1971)の愛着研究に見られるように、内的体験を反映したものであり、その行動的な表れが愛着なのである(土居,1989)。我々は次のように仮定することができるだろう。すなわち、精神分析的には甘えは層をなした概念を提供しているのであって、その概念は、受動的に愛を受け取り、ほしいままにするための、能動的な本能的/情動的努力を描いているのだ、と。

「願望-欲動」としての甘えという土居の定義に替わるもうひとつのものは、洋の東西を問わず他にも確かに存在するものの特に日本人の心理においてはよく見られるような特定の形の防衛としての甘えを再定義することであろう。そのように考えると、我々は甘えを自我の防衛作用として見ることができるだろう。すなわち、超自我の要求とイドの要求を調停しながら我儘を許してもらおうとする懇願として、或いは、ライフサイクルのどの発達段階であれ、個人的願望としてである。この形式の自我の防衛は、超自我への硬直した服従を要求する厳しい社会に適応するためおそらく必要なものである。階級的関係の秩序と集団志向、規則・役割・行動の厳守、個人的な意見や感情を秘密にすること、葛藤を恥として解決すること、これらはすべて、封建社会に起源をもつ超自我形成に対処するための方法であるように思われる。こうした硬直した或いは過酷な超自我の要求に応えるために、甘えは「許し」-「寛大さ」-への「甘い」理解を求めて、個人の攻撃欲動に対する、あるいは対象を失うかもしれないという不安に対する必要な防衛として、非言語的で情緒的なコミュニケーションと共感的な反応に頼る。甘えという自我の調停が個人の感情生活に場所を作り、リビドー的なものであれ攻撃的なものであれ、個人の人間的欲求の表出に道を作る。甘えは、共感的反応で子供の情緒的欲求や願望を感じる能力を持った寛大な養育者との前言語的な体験への同一化に起源を持つ。これはおそらく「普通に献身的な母親」を特徴づける

「母親の原初的没頭」という Winnicott(1965)の概念に類似している。この文脈において、自我関係性（抱えること、やさしさ、共感）を提供する環境としての母親と、イド衝動/欲動が向かう対象としての母親との Winnicott の区別は、Freud の初期の愛の情愛的潮流と官能的潮流との区別に対する対象関係論的観点からの表現を示していると思われる。

＃え及び＃える行動を用いた交流は、抑圧・退行・部分的退行・打消し・反動形成・「相互の秘密」或いは昇華への小道といったような様々な防衛作用の中に整理することができる。

この防衛—適応としての定式化の中でも、「相互性」の概念が発達的・关系的・転移的に＃えの中に含まれている。Hartmann(1958)の乳児と母親の適合 fitting together の概念、Winnicott(1965)の「抱える環境 holding environment」という考え、Bion(1962)の「コンテナ—コンテナド container/contained」概念、Kohut の「自己—対象 self-object」(1971)、Stern(1985)の「間情動性 inter-affectivity」もまた、同様に当てはまるだろう。＃えの行動は、個人の願望や欲求が文化的—超自我的制限と衝突する時にはいつもライフサイクルを通して作用していると言える。

## VI. 結論

以上から、＃えの行動や態度は単なる依存欲求の現われとして見ることはできないということになる。欲動/願望と防衛の形という両者が文脈によって複雑に置換される中で＃えを見ることが有効である。この複雑な見方は特に転移における相互作用に当てはまる。臨床における二者関係での＃えの出現は、臨床家に対する信頼と誠実さの増大という陽性転移を示すだろうし、それは治療同盟に資するだろう。患者に精神分析療法を求めさせる意識的動機が何であろうとも、その根本の無意識的動機は＃えのそれであり、やがて結局は＃えが転移の核となると土居(1989)は考えた。けれども臨床家は、特に日本の臨床状況に固有の(或いは、どんな精神分析設定においてもだが) 転移の階級的性質に気付く必要があり、もし＃えが基本的欲求・本能的努力・防衛過程、或いは複雑な発達論的—力動的布置として概念化されるならば、「陽性」と「陰性」の両方の非言語的或いは間接的交流に敏感に反応する必要がある。同様に、日本人の患者の集団志向は、西洋文化において簡単に現れるように、境界や個体化の欠如として単純に理解することはできない。

＃え概念の発見は特定の日本的状況に帰するけれども、それは文化をまたいで様々な程度に見られ得る。集団心理学の文脈の中では、＃えはそこにいる各個人の欲求に複雑に関係

し、その集団設定に属している。発達の及び臨床的には、早期の母性的補給・コンテニン  
グ・抱えることの影響は#えの中に認められる一方、#えの内的な相互作用の力動は個人の  
全生涯に及ぶ（土居,1989; Freeman,1998）。

土居の#えに関する発展性のある寄与は、特定地域の発達の及び臨床的日本の概念で  
ありながら世界に広がりを持つものとして認められる必要がある。それは地理的境界・精神  
分析文化・個人の条件を超えて理論的流暢さと臨床的感受性を豊かにするだろう。

### 参考文献

Akhtar, S and Kramer, S (1998). *The Colors of Childhood: Separation Individuation across Cultural, Racial and Ethnic Differences*. Northvale, NJ: Jason Aronson.

Akhtar, S, ed. (2009). *Comprehensive Dictionary of Psychoanalysis*. London: Karnak.

Balint, M (1935/1965). Critical notes on the theory of pregenital organizations of the libido.

In, *Primary Love and Psycho-Analytic Technique*. New York: Liveright Publishing. 森茂起・柘矢知子・中井久夫共訳（1999）「リビドーの前性器的編成の理論に対する批判的覚書」『一次愛と精神分析技法』みすず書房

Balint, M (1936). The Final Goal of Psycho-Analytic Treatment. *Int. J. Psycho-Anal.*, 17:206-216.

Balint, M (1968). *The Basic Fault: The Therapeutic Aspects of Regression*. London, New York:Tavistock Publications. 中井久夫訳(1978)『治療論からみた退行』金剛出版

Benedict, R (1946). *The Chrysanthemum and the Sword*. Cambridge, Mass: The Riverside

Press. 角田安正訳(2013)『菊と刀』光文社古典新訳文庫 長谷川松治訳(2005)『菊と刀』講談社学術文庫 越智敏之他訳(2015)『菊と刀』平凡社ライブラリー

Bethelard, F and Young-Bruehl, E (1998). Cherishment Culture. *American Imago*. 55: 521-

542.Back to Table of Contents11

- Barnlund, DC (1975) *Public and Private Self in Japan and the United States*. Tokyo: Simul Press. 西山千訳 (1979) 『日本人の表現構造—公的自己と私的自己・アメリカ人との比較』サイマル出版会
- Bion, WR (1961). *Experiences in Groups and Other Papers*. New York: Basic Books. ハフシ・メッド監訳 (2016) 『集団の経験』金剛出版
- Bion, WR (1962). *Learning from Experience*. London: Tavistock. 福本修訳(1999) 「経験から学ぶこと」『精神分析の方法 I—セブン・サーヴァンツ』法政大学出版局.
- Blanck, G and Blanck, R (1994). *Ego Psychology: Theory and Practice*. New York: ColumbiaUniversity Press.
- Bowlby, J (1969). *Attachment and Loss, Vol.1: Attachment*. New York: Basic Books.(revised edition, 1982). 黒田実郎他訳 (1976) 『母子関係の理論 I 愛着行動』岩崎学術出版社
- Doi,T (1962). *Amae: a key concept for understanding Japanese personality structure*. *Japanese Culture*. (R.J. Smith & R.K. Beardsley, transl, eds.) Chicago: Adline Publishing.
- Doi,T (1963). Some thoughts on helplessness and the desire to be loved. *Psychiatry*.26,266-272,
- Doi, T (1971). *The Anatomy of Dependence*. Tokyo: Kodansha. (Japanese original) 土居健郎(1971) 『甘えの構造』弘文堂
- Doi, T (1973). *The Anatomy of Dependence*. Kodansha International, Tokyo (English Translation).
- Doi, T. (1989). The Concept of AMAE and its Psychoanalytic Implications. *Int. R. PsychoAnal*, 16:349-354. 土居健郎(1997) 「「甘え」概念とその精神分析的意義」『「甘え」理論と精神分析療法』金剛出版
- Doi,T (1992). On the concept of Amae; *Infant Mental Health Journal*,13, 7-11
- Doi,T (1993). Amae and transference love. In: *On Freud's "Observations on Transference Love"* E.S.Person, A.Hogelin & P.Fonagy, eds. Pp: 165-171. 土居健郎 (1997) 「「甘え」と転移性恋愛」『「甘え」理論と精神分析療法』金剛出版
- Erikson, EH (1950). *Childhood and Society*, New York: WW Norton. 仁科弥生訳

(1977) 『幼児期と社会』 みすず書房

Fairbairn, WRD (1952). *Psychoanalytic Studies of the Personality*. Routledge & Kegan Paul, London / *An Object-Relations Theory of Personality*. Basic Books, New York. 山口泰司訳(1995) 『人格の精神分析学』 講談社学術文庫 栗原和彦編訳、相田信男監修(2017) 『対象関係論の源流』 遠見書房

Freeman, D. (1998). Emotional Refueling in development, mythology, and cosmology: the Japanese separation-individuation experience. In: Akhtar, S and Kramer, S. (eds), *The Colors of Childhood: Separation Individuation across Cultural, Racial and Ethnic Differences*. Northvale, NJ: Jason Aronson.

Freud, S (1910). 'Wild' Psycho-Analysis, S.E.XI. 高田珠樹訳 (2009) 『『横暴な』精神分析について』 『フロイト全集 11』 岩波書店.

Freud, S (1912). On the universal tendency of debasement in the sphere of love (Contributions to the psychology of love II), S.E.XI. 須藤訓任訳 (2009) 「性愛生活が誰からも貶められることについて」 『フロイト全集 12』 岩波書店

Freud, S (1914). On narcissism. S.E. XIV. 立木康介訳 (2010) 「ナルシズムの導入にむけて」 『フロイト全集 13』 岩波書店

Freud, S (1921). Group psychology and the analysis of the ego., S.E.XVIII. 藤野寛訳 (2006) 「集団心理学と自我分析」 『フロイト全集 17』 岩波書店

Freud, S (1930). Civilization and its discontents, S.E.XXI. Back to Table of Contents  
12 嶺秀樹・高田珠樹訳 (2011) 「文化の中の居心地悪さ」 『フロイト全集 20』 岩波書店

Hartmann, H (1958). *Ego Psychology and the Problem of Adaptation*. New York: International University Press.

Klein, M (1957). *Envy and Gratitude*, London: Tavistock Publications. 松本善男訳 (1996) 「羨望と感謝」 『メラニー・クライン著作集 5』 誠心書房

Kohut, H (1971). *The Analysis of the Self*. Madison: Int.Univ.Press. 水野信義・笠原嘉監訳(1994) 『自己の分析』 みすず書房

Mahler, M.S. and Furer, M (1968). *On Human Symbiosis and the Vicissitudes of Individuation*. New York: Int.Univ.Press.

Mahler, MS, Pine F, MM and Bergman, A (1975). *The Psychological Birth of the Human*

- Infant*. New York: Basic Books. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳(2001)『乳幼児の心理的誕生』黎明書房
- Nakane, C (1970). *Japanese Society*. Berkeley: University of California Press. 中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係』講談社現代新書
- Okonogi, K, Kitayama, O, Ushijima, S, Kano, R, Kinugasa, T, Fujiyama, N, Matsuki, K, Myouki, H, eds. (2002). *The Japanese Dictionary of Psychoanalysis*. Tokyo: Iwasaki Gakujutu Shuppansha Books. 小此木啓吾編集代表、北山修編集幹事(2002)『精神分析事典』岩崎学術出版社
- Passim, H (1965). *Society and Education in Japan*. New York: Columbia University Press.
- Reischauer, EO (1977). *The Japanese*. Cambridge, London: Belknap Press. 國弘正雄訳(1979)『ザ・ジャパニーズ』文芸春秋
- Roland, A (1991). *In Search of Self in India and Japan: Toward a Cross Cultural Psychology*. Princeton: Princeton University Press.
- Spitz, RA (1965b); *The First Year of Life: Normal and Deviant Relations*. New York: Int.Univ.Press.
- Stern, DN (1985); *The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*. New York: Basic Books. 小此木啓吾・丸太俊彦監訳 神庭靖子・神庭重信訳(1989)『乳児の対人世界』岩崎学術出版社
- Winnicott, DW (1965). *The Maturation Process and the Facilitating Environment*. New York: International University Press. 牛島定信訳(1977)『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社

#### 各地域の顧問と貢献者

北米： Written collaboratively by Takayuki Kinugasa, M.D. and the members of the Japan Psychoanalytic Society; Nobuko Meaders, LCSW; Linda A. Mayers, PhD; Eva D. Papiasvili, PhD, ABPP

ヨーロッパ : Reviewed by Arne Jemstedt, MD, and the European Consultants

中南米 : Reviewed by Elias M. da Rocha Barros, Dipl. Psych., and the Latin American Consultants

地域間連携共同議長 : Eva D. Papiasvili, PhD, ABPP

追加特別編集補助 : Jessi Suzuki, M.Sc.

---

国際精神分析学会地域間精神分析百科事典 (The IPA Inter-Regional Encyclopedic Dictionary of Psychoanalysis) は、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス CC-BY-NC-ND が付けられて出版許可されています。中核的権利は著者ら (IPA と IPA 会員寄稿者) にありますが、非営利的使用、全出典が IPA (この URL [www.ipa.world/IPA/Encyclopedic\\_Dictionary](http://www.ipa.world/IPA/Encyclopedic_Dictionary) の参照も含みます) にあること、模倣や編集やリミックスの形式でなく逐語的複製であること、などの条件で他者も素材を使用することができます。各用語についてはこちらをクリックしてください。

---

訳出 : 鷲谷公子、中甫木くみ子 (訳)、吾妻壮 (監訳)